



あさの かずお  
**浅野和生**

愛知教育大学教授  
ヨーロッパ中世美術史

愛知教育大学教育学部教授。1956年生まれ、60歳。大阪大学・大学院で西洋美術史を学ぶ。ギリシア政府給費留学生としてアテネ工科大学留学。専攻はヨーロッパ中世の美術史。特にビザンティン帝国（現在のギリシアからトルコ周辺）の、6～10世紀の教会壁画や工芸品などを研究課題としている。2012年から日本ビザンツ学会代表。著書に「ヨーロッパの中世美術」（中公新書）、「サンタクロースの島—トルコ地中海岸ビザンティン遺跡発掘記」（東信堂）、「イスタンブールの大聖堂」（中公新書）、編著書に「The Island of St. Nicholas」（大阪大学出版会）など。中日新聞紙上で中部地方の展覧会批評を連載中。

1年半ほど前、還暦が近づいて自分の人生が終楽章にさしかかると感じ、何か新しいことを始めて日々を一層充実させたいと思った。そこで思いついたのが、フルートを習うことである。

音楽はずっと趣味にしてきた。聴くのは、クラシックでも歌謡曲でも好きだ。中学に入ってギターを買ってもらい、早速文化祭のステージで友だちとフォーク・ソングを歌った。クラシック・ギターを弾き、高校のクラブ活動で混声合唱をやり、大学・大学院では美術史を専攻したが音楽史も学んだ。その後も、合唱に参加したり、ロック・バンドでエレキ・ギターを弾いたりした。勤務先の軽音学部の学生たちとも、ときどき一緒に演奏する。



学生たちとのバンドでギターを弾く

私はそういう自分の音楽遍歴を振り返って、手当たり次第にやってきたと感ずるので、フルートは指導者についてちゃんと習おうと思った。近くの音楽教室の門を叩き、森近鈴香先生を紹介された。「どのメーカーの楽器を買うのがいいですか？」とお聞きしたところ、先生は言下に「ムラマツです」とおっしゃった。

ムラマツのEXモデルは人気商品で品薄だったが、インターネットで探しているうち、在庫のある楽器店を見つけた。まだ音も出せないの先生に試

奏していただいて、無事購入することができた。フルートを始めようと思いついたのが夏、楽器を入手して最初のレッスンを受けたのが10月であった。

森近先生の指導は「ほめて伸ばす」もので、私は子どものようにほめられて毎日練習に励んだ。良い音が出せたりうまく吹けたと思ったりすると、必ずほめていただけるのでうれしかった。初めて音楽に向かうような気持ちで、毎回多くのことを学んだ。色々と好きな曲も吹けるようになって、ますます楽しくなっていた。

フルートのレッスンは、私の大学での教え方にも大いに影響を与えた。学生のレポートを読み、ゼミ発表を聞いて、良いところや伸ばせるところを見つけて、最大限にほめるようにした。しかし甘い教師になったわけではない。私もフルートでは学ぶ立場であると学生に話し、「自分への要求水準を高く持って、自分自身が満足できるま



発表会

で勉強しなさい」と鼓舞した。

私は中学の文化祭以来、下手をかえりみず人前で演奏してきた。フルートを始めてちょうど1年たった頃に、音楽教室の発表会があった。ピアノを習い始めたかわいらしい小学生たちに混じっての初出場は、恥ずかしかったが貴重な経験であった。また同じ頃に長女の結婚式があり、新郎新婦と3人で合奏することができた。これは一生忘れられない思い出になった。

まだほんの初心者だが、このようにして、人生を充実させたいという望みはかなえられつつある。私はとりわけ、フルートを通じて人々との交流が広がり深まっていくことに感謝している。

長女の結婚式で新郎新婦と演奏

